

# みやけの風

## 第 174 号

平成 16 年 (2004 年) 5 月 22 日 (土) 発行  
 発行：三宅島災害・東京ボランティア支援センター  
 発行責任者：上原 泰男  
 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ 10階  
 東京ボランティア・市民活動センター 気付  
 TEL：03-3260-7573 FAX：03-5229-1646  
 E-mail：tokyocenter@cmpo.org

帰島の意向調査が我が家にも来ました。村長の決断を受けて、「火山ガスとの共存」という方向を選べるのかどうか。山ほどの困難や不安があっても帰島の道はそこにしかないとするれば、島民それぞれが自分の考えと判断で答えるしかありません。我が家でも家族会議を開きます。

### みんなの声

#### 三宅島支援センター御中

前略 第8回ふれあい大会では楽しく踊らせていただき、ありがとうございました。

あの夜、島の人からも電話があり、「はじめて見た。とてもよかった」と云ってくれました。きれいだった、踊りが良いと云うよりは、衣装がきれいだということでしょうね。それでも喜んでくれる人がいた事は、私たちも嬉しいです。

望郷の念に駆られながらの生活も、いつしか地域にとけ込み、はや3年9ヶ月、島を思えば複雑な心境です。

帰島に向けての動きに明るさも見えてきましたが、勤勉な島民も高齢化で過疎の島としては不安がいっぱいです。

この年月、ボランティアの方々のご支援力強く、感謝の気持ちでいっぱいです。未だ続くこの生活も、皆さまの応援があればこそ島の人も頑張れます。

天候不順の折、皆様にはお身体に充分お気をつけられご活躍なされます様、先づはお礼まで

2004年5月13日

(川口市 新郷フラダンスクラブ 高橋 きみ枝)

#### 大崎さんの桜島紀行 火山の島で その1

東久留米に避難している伊豆で農業をしていた大崎さんより、桜島に行った時の思いを書いていただきました。たいへんな力作なので、4回に分けて今回から連載にさせていただきます。

(みやけの風編集担当)

活動中の火山島で暮らすにはどうしたらいいのか？

1月14日から3泊4日で、桜島を見てきました。

特に、私の本業である農業はどうやっているだろうか？どんな作物を作り、何か特別な対策をしているのだろうか？

桜島へは、普通とは逆の、東側の大正大噴火で大隈半島と陸続きになった垂水（たるみず）側から入りました。

三宅でいえば、坪田地区の釜方あたりになる方角です。

殺伐としています。溶岩が荒々しくむき出て、噴煙を上げる南岳がせまり、松くい虫にやられたばかりの真っ赤に枯れた松が無数に立ち、そして、人家が一軒もありません。冬の季節風の風下になり、火口に近い地区です。

畑が多いのは、北西部から北部にかけてからのようです。三宅でいえば、伊ヶ谷、伊豆、神着方面になります。溶岩に被害がなく、冬場の季節風の風下にならず、火口から遠い地区です。

3日間バスを乗り継ぎ、農業地帯をひたすら歩きました。そして畑仕事をしている人（ほとんどが高齢者でした）を見つけると、桜島の農業のことをあれこれ聞きました。

観光スポットでもない、人家から離れた小ミカン畑やピワ畑、桜島大根畑、牛小屋などを見知らぬ旅行者がウロウロして話しかけてきても、誰も不審な顔をせず、突っ込んだことを聞いても、それはていねいに教えてくれました。

こんなに厳しい島に暮らしているのに、人々はなんて穏やかで、親切なのだろうか？と新たな疑問が出てきました。

続く

(東久留米市 大崎 興洋)

三宅島島民ふれあい集会では、たくさんの方から応援のメッセージをいただきました。その中からいくつかをご紹介します。

## 第 8 回三宅島島民ふれあい集会のご報告 その2

## 港区長 原田敬美様

第1回目のふれあい集会から、様々な方面でご協力をいただいております、港区長 原田敬美様よりのご挨拶

私は4年間港区長という仕事をさせていただきながら、文字通り皆様とこうやってお目に掛る機会を、8回繰り返させていただいたわけでありませう。

申し上げるまでもないわけですが、港区には竹芝埠頭があります。従いまして三宅島含め、伊豆諸島の東京に対する玄関口として港区は位置付けられております。そういった意味で、大変長いお付き合いを皆様方とさせていただいております。港区の中に避難生活で過ごされている方も多くいらっしゃいます。一日も早く帰島が叶うことを願っておりますけれども、避難生活の間、港区と致しまして、どうか皆さんが快適にお過ごしになれますように、全力で可能な限りのことをさせていただきたいと思っております。また、これからも一日も早く帰島が叶うように願っておりますけれども、その間の避難生活が快適に過ごせますように、全力をあげて応援をさせていただきたいと思っております。

これから、島の復興に関しまして港区が

## 三宅島復興応援団 青山侑 様

2000年の噴火が始まったときから、東京都副知事として、災害対策本部長として三宅島島民を支えてこられた青山様からのメッセージ

私、今では都庁を定年退職しましたので、行政という立場ではなく完全にフリーで、一市民として一都民として三宅島支援センターの応援団の仕事させていただいております。

今日のふれあい集会も、すっかり定着しましたがけれども、色々な団体の人達がここに集まっています。支援センターを通じて、政治も宗教も越えて、色々な会社の人も含めて手伝ってくれてるわけで、そういうネットワークを組むためのセンターというのは、どうしても必要なんですね。

今の日本の制度では災害の場合に、応急対策で色々支援する制度っていうのは災害対策基本法で出来るんですけども、実際に避難指示を解除して帰ると、その後のことは全く、災害対策基本法では少なくとも想定してません。もちろん、行政も一生懸

できることを一生懸命にさせていただきたい、そんなつもりであります。例えば観光なんていうこともあるでしょう。これも区長会で23人の区長が、三宅島はじめ伊豆諸島の観光振興をお手伝いしようということで、様々なことを考えております。三宅島の帰島が叶った折には、多くの東京都民が三宅島にお邪魔させていただいて、新しく生まれ変わる三宅島の中で、美しい自然を堪能したいと皆で期待をしております。

これからまだまだ大変なことがあるかと思いますが、どうか、少なくとも避難生活におきましては安心してお過ごしいただきたいと思っております。帰島の準備、港区をはじめ各区が一生懸命に応援をさせていただきたいと思っております。帰島にあたって各区、港区も一生懸命頑張りますけれども、各区が一生懸命に応援をさせていただき、そんなつもりであります。どうか、皆さんも避難生活、楽しく過ごしていただく中で一日も早く帰島が叶いますように、祈っております。

今日は一日この芝浦小学校の校舎、校庭をご利用いただくわけでございますけれども、どうか存分に今日の一日楽しくお過ごしをさせていただきたいと思っております。本日はお招きありがとうございました。

命やると思いますが、たぶん支援センターの仕事もこれから大変だろうということで、もうちょっと輪を広げないととても対応できないという心配を致しまして、それで応援団を創ろうと。皆さんとのお付き合いも結局お互いに腐れ縁ですから、我慢してください。私も全島避難を決定した時の、行政の責任者の一人ですから、皆さんがいずれ、戻ってからもずっと自分で出来ることを一市民として皆と一緒にやっていこうと思っています。

本当にこの周りのテント、それからこのテントじゃない会場の周り、そして東京中日本中の人々が皆で三宅島のことを、今でも気にして心配をして、それで自分にできる手助けはさせていただこうと思っているということは、皆さんいつまで忘れないで、希望を持って生活をしていただきたいと思います。まだまだ、がんばりましょうね。